

〔川崎医療福祉学会ニュース〕

## 平成15年度川崎医療福祉学会総会

平成15年6月5日(木)  
司会 米谷 正造

副会長挨拶 伊澤 秀 而 副会長

## 議 事

1. 平成14年度事業報告と収支決算について
2. 学会役員について
3. 平成15年度事業計画と収支予算について
4. その他

## 総会資料

## 平成14年度 事業報告

- 6月6日(木) 川崎医療福祉学会総会及び第22回研究集会  
 6月25日(火) 川崎医療福祉学会和文誌第12巻1号発行  
 " 川崎医療福祉学会英文誌第8巻1号発行  
 9月28日(土) 川崎医療福祉学会講演会  
 11月14日(木) 川崎医療福祉学会第23回研究集会  
 11月30日(土) 川崎医療福祉学会講演会  
 12月25日(水) 川崎医療福祉学会和文誌第12巻2号発行  
 " 川崎医療福祉学会英文誌第8巻2号発行

## 平成14年度 収支決算

収入の部 (単位:円)

科 目	決 算 額
会 費 収 入	3,321,000
内 会 員	3,222,000 (426名)
訳 購 読 会 員	99,000
学 園 補 助 金	4,500,000
内 和文会誌12巻1号	1,410,000
和文会誌12巻2号	1,410,000
英文会誌8巻1号	840,000
訳 英文会誌8巻2号	840,000
そ の 他 収 入	656,082
繰 越 金	9,539,641
合 計	18,016,723

支出の部 (単位:円)

科 目	決 算 額
会 誌 編 集 ・ 印 刷 費	6,130,750
内 和文会誌12巻1号	1,962,250
和文会誌12巻2号	2,226,750
英文会誌8巻1号	890,000
訳 英文会誌8巻2号	1,051,750
会 誌 送 付 費	349,145
講 演 会 費	258,166
事 務 用 関 係 費 等	368,196
予 備 費	0
合 計	7,106,257

収入総額 - 支出総額 = 差引残額(翌年度繰越金)  
 18,016,723円 - 7,106,257円 = 10,910,466円

## 平成15年度 事業計画

- 6月5日(木) 川崎医療福祉学会総会及び第24回研究集会  
 6月25日(水) 川崎医療福祉学会和文誌第13巻1号発行  
 " 川崎医療福祉学会英文誌第9巻1号発行  
 11月13日(木) 川崎医療福祉学会第25回研究集会  
 12月25日(木) 川崎医療福祉学会和文誌第13巻2号発行  
 " 川崎医療福祉学会英文誌第9巻2号発行

## 平成15年度 収支予算

収入の部		(単位:円)	支出の部		(単位:円)
科目	予算額		科目	予算額	
会費収入	3,503,000		会誌編集・印刷費	6,750,000	
内 会 員	3,404,000		内 和文会誌13巻1号	2,115,000	
訳 購読会員	99,000		和文会誌13巻2号	2,115,000	
学園補助金	4,500,000		英文会誌9巻1号	1,260,000	
内 和文会誌13巻1号	1,410,000		訳 英文会誌9巻2号	1,260,000	
和文会誌13巻2号	1,410,000		会誌送付費	560,000	
英文会誌9巻1号	840,000		講演会費	1,000,000	
訳 英文会誌9巻2号	840,000		事務用関係費等	700,000	
その他収入	386,534		予備費	10,290,000	
繰越金	10,910,466		合 計	19,300,000	
合 計	19,300,000				

特別会計	学会15周年記念事業会計	6,312,380円
	学会事業基金	6,007,846円

## 川崎医療福祉学会役員名簿

役名	役員名	
会長	学 長	岡田喜篤
副会長	副 学 長	産賀敏彦
副会長	副 学 長	伊澤秀而
副会長	副 学 長	小池将文
運営委員長	医療福祉学科 教授	大田 晋
運営委員	臨床心理学科 助教授	網島啓司
"	保健看護学科 講師	矢野香代
"	医療福祉マネジメント学科 教授	藤原 巍
"	医療福祉環境デザイン学科 教授	佐藤國康
"	医療情報学科 教授	太田 茂
"	感覚矯正学科 教授	寺尾 章
"	健康体育学科 助教授	米谷正造
"	臨床栄養学科 助教授	原野恵子
"	リハビリテーション学科 講師	西本千奈美
監事	臨床心理学科 助教授	林 明宏
"	臨床栄養学科 教授	美祢弘子
幹事	健康体育学科 助教授	米谷正造

〔川崎医療福祉学会ニュース〕

## 川崎医療福祉学会 第24回研究集会

平成15年6月5日(木)

## 研究発表

## 1. 海外移住と人権の問題に関する研究

— とくに、第2次大戦中の米国における日系人隔離政策問題に関する文献的展望から見た実態とその背景 —

川崎医療福祉大学 医療技術学部 感覚矯正学科 上原 進

## 2. 注意が視知覚に及ぼす影響について

川崎医療福祉大学大学院 医療技術学研究科 感覚矯正学専攻(修士課程)

三宅 智恵

川崎医療福祉大学 医療技術学部 感覚矯正学科

木村 久

田淵 昭雄

## 3. 描画による外在化処方の有効性の検討

— 不登校 A 事例の面接経過と現地の聞き取り調査をふまえて —

川崎医療福祉大学大学院 医療福祉学研究科 医療福祉学専攻(修士課程)

野瀬 光司

川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科

石川 瞭子

## 4. Crohn 病患者の腸内環境に関する研究

川崎医療福祉大学大学院 医療技術学研究科 健康科学専攻(博士課程)

大竹 正晃

川崎医療福祉大学 医療技術学部 臨床栄養学科

寺本 房子

藤田 美明

学会運営委員長挨拶

大田 晋 教授

## 研究発表要旨

## 海外移住と人権の問題に関する研究

— とくに、第2次大戦中の米国における日系人隔離政策問題に関する文献的展望から見た実態とその背景 —  
川崎医療福祉大学 医療技術学部 感覚矯正学科 上原 進

近年、我が国では発展途上国からの労働者流入問題が社会的な注目を浴びる事が多い。ところが、かつて、わが国から多くの人たちが海外へ移住せざるを得なかった事実を認識するものは少なくなってきた。戦後の昭和30年代前半までは国策として展開されていた「中南米移民政策の存在」についても既に一般市民の認識は浅く、また、その悲劇的な末路については知られることが少ない。

明治維新直後から始まった北アメリカ大陸への移

住問題では、長い間、日本の社会とアメリカ社会の両者の「ハザマ」にあって当事者たちが様々な苦悩を味合ってきた。演者はかねてより、様々な移住者の問題についての関心を抱いてその実態に関心の目を向けてきた。

その一部として、「第2次大戦時の“アメリカ在住日系人の隔離政策問題”の実態とその背景」を文献的展望によって紹介し、あわせて、その資料収集に活用できるインターネットの効用に言及した。

## 注意が視知覚に及ぼす影響について

川崎医療福祉大学大学院 医療技術学研究科 感覚矯正学専攻 三宅 智恵  
川崎医療福祉大学 医療技術学部 感覚矯正学科 木村 久 田淵 昭雄

「通り抜け」か「跳ね返り」に2つの解釈が成立する動的な曖昧視標がある。動的な曖昧視標とは同じ大きさ、同じ速度で行き交うように交差する2つの視標のことである。本研究では、この曖昧視標を用いて注意が視知覚に及ぼす影響について検討した。曖昧視標に視覚刺激を提示して注意を引くと、「跳ね返り」と知覚する割合が増加するという報告がある。この現象を Bouncing-induced effect という。本研究では視覚刺激だけでなく、聴覚刺激で注意を引くことによって Bouncing-induced effect が起こることがわかった。これにより、視覚-視覚のみならず視覚-聴覚間にも注意の相互作用があることがわ

かった。また、注意の側面から受動的注意・能動的注意にわけて跳ね返り知覚の割合を比較すると、両者で Bouncing-induced effect が認められた。このことから Bouncing-induced effect による跳ね返り知覚は、反射的な注意による反応であることが示唆され、高次の大脳レベルに達しない下位の部分で起こっていると考えられた。さらに、注意が視知覚に影響を及ぼす時間的特性を検討した結果、注意には時間を補正する働きがあり、同感覚間よりも異種感覚間のほうが、刺激に対する時間的な曖昧性を解く働きが強いと考えられた。

## 描画による外在化処方の有効性の検討

— 不登校 A 事例の面接経過と現地の聞き取り調査をふまえて —

川崎医療福祉大学大学院 医療福祉学研究科 医療福祉学専攻 野瀬 光司  
川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科 石川 瞭子

本研究は不登校 A 事例における子への対応の一手段として用いた描画による心の外在化処方の有効性について検討することである。不登校 A と家族に対して約半年間に計6回の面接を行った。その結果、家族面接3回目で家族の関係が変化し A は再登校することができた。A 自身が生活を振り返ることを通

して自身の行動パターンを変化させることができたと思われた。A の描画による外在化は A の行動を変化させただけでなく A 家の家族関係を見直す機会を与えたと考えられた。後に、演者らは現地での聞き取り調査を行い、裏付けを取ることができたので報告する。

## Crohn 病患者の腸内環境に関する研究

川崎医療福祉大学大学院 医療技術学研究学科 健康科学専攻 大竹 正晃

川崎医療福祉大学 医療技術学部 臨床栄養学科 寺本 房子 藤田 美明

Crohn 病(以下 CD)の栄養療法は、腸管への刺激をさけて安静を保つため、食物繊維摂取量が健常者に比べて少なく、そのことが腸内環境に何らかの影響を及ぼすことが予測される。本研究では、CD 患者の腸内環境について調べ、さらに、腸内環境改善効果が報告されているラクトスクロース(以下 LS)投与による影響について検討した。緩解期の CD 患者26例を対象とし、さらに同意の得られた14例に LS を24週間投与した。これらの患者について、

糞便中水分、pH、有機酸、アンモニア、腐敗物質、病態、及び食物繊維摂取状況を調査した。経腸栄養剤のみ摂取の CD 患者に比べ、低残渣の日常食を組み合わせて摂取している患者および LS を投与した患者の糞便では、水分、コハク酸、乳酸が有意の低値を、短鎖脂肪酸は有意に高値を示した。以上のことより、低残渣の日常食を摂取し、さらに LS を添加することは、CD 患者の腸内環境を改善すると考えられた。